
TBSテレビ『クレイジージャーニー』 「爬虫類ハンター」企画に関する意見

放送倫理検証委員会

委員長	神田 安積
委員長代行	鈴木 嘉一
委員長代行	升味佐江子
委員	大石 裕
委員	岸本 葉子
委員	高田 昌幸
委員	長嶋 甲兵
委員	中野 剛
委員	西土彰一郎
委員	巻 美矢紀

目次

I	はじめに	1
II	審議の対象とした番組	2
1	『クレイジージャーニー』及び「爬虫類ハンター」とは？	2
2	本件放送の概要	2
(1)	2時間スペシャル	2
(2)	レギュラー枠	4
III	委員会の検証	4
1	『クレイジージャーニー』の制作体制	4
2	本件放送の制作過程	5
(1)	ロケ前の企画・準備の経過	5
(2)	ロケの事実経過	6
(3)	編集、放送に至るまで	7
3	過去10回の「爬虫類ハンター」における事実関係	8
IV	委員会の考察	8
1	視聴者との約束を裏切った本件放送の「事前準備」	8
2	「撮れ高」に縛られる現場	9
3	孤立する担当ディレクター	11
V	問題発覚後のTBSの対応	12
VI	委員会の判断 放送倫理違反があった	13
VII	おわりに 『クレイジージャーニー』から始まる改革	13

I はじめに

ひょうきんなカメレオンから猛獣を丸飲みする巨大アナコンダまで、爬虫類はジュラ紀の恐竜につながり、エデンの蛇から竜宮城の亀まで、人類の冒険心や欲望を呼びさます。そんな爬虫類の魅力とロマンいっぱいの人気企画があった。TBSテレビ(以下「TBS」という)『クレイジージャーニー』の「爬虫類ハンター」である。

爬虫類の専門家であるX氏が、少年のように目を輝かせ、深い森やジャングルに分け入り、溪流をさかのぼり、目的!と見るや、カメラを振り切って走り、転び、飛びかかり、すばしこいトカゲや毒ヘビ、どう猛なワニさえも素手で捕まえる。専門家が「爬虫類ハンター」に変身し、特異な能力を発揮して次々と希少動物を発見し捕獲する姿に視聴者は釘付けになった。

しかし、順調にみえた『クレイジージャーニー』の歩みが、2019年9月に止まった。TBS視聴者センターにかかってきた1本の電話によれば、同年8月14日放送の「爬虫類ハンター」のメキシコ編(以下「メキシコ編」という)において、ロケで「やらせ」があったのではないかと、いう。TBSは、急きよ担当ディレクターに問いただし、電話の内容が事実であることを確認。社内調査の結果、「メキシコ編」で紹介した6種類のうち4種類がロケの前に準備していた動物を使って撮影していたものであり、準備していたものをあたかもその場で発見したかのように描いたことを公表した。特異な能力を発揮して次々と希少動物を発見し捕獲していたはずの「爬虫類ハンター」。その肝心の捕獲した動物の中に、あらかじめ協力者から借り受け、または別の場所で捕獲して、撮影直前に現場に置かれたものが含まれていたのである。

またTBSは、「メキシコ編」以前に過去10回放送した「爬虫類ハンター」においても、37種類中11種類は、現地の人があらかじめ捕まえた動物を、ロケ当日か前日に捕獲場所に再び戻してもらうことを依頼し、ロケ本番時、その場所で探索、捕獲していたことを明らかにした。

そのうえで、局は、「事実に依拠した番組で事実を歪めたことになり、決してあってはならないもの」として、お詫びと番組休止を公表。そして、10月21日には、不適切な手法で視聴者の信頼を損なったことを重く受け止めて、番組の継続は困難と判断し、放送終了を決定した。

BPO放送倫理検証委員会(以下「委員会」という)は、TBSから提出された番組の録画や報告書の内容を踏まえ、10月及び11月開催の定例会で討議した。その結果、日本民間放送連盟の放送基準に抵触している疑いがあり、制作過程を検討してこの内容が放送されるに至った経緯を解明する必要があるとして、「メキシコ編」について審議入りを決定した。

II 審議の対象とした番組

1 『クレイジージャーニー』及び「爬虫類ハンター」とは？

『クレイジージャーニー』は、TBS系列で2015年1月に深夜の特別番組として放送を開始し、同年4月16日から2019年9月4日まで、レギュラー番組として毎週水曜日午後11時56分から翌日午前0時55分の深夜枠で放送されていたバラエティーである。“クレイジージャーニー”（以下「ジャーニー」という）とは、冒険家、ジャーナリスト、料理人などの中でも、独自の視点やこだわりを持って世界を巡る旅人たちのこと。少数民族の村や「銃の密造村」などの危険地帯に踏み込んでゆく旅、奇妙な風景を探す「奇界遺産」と称する旅などのVTRと、ジャーニーたちをスタジオに招き3人のMCを相手にディープな旅の体験を語ってもらうスタジオトークで構成される。

今回問題になった「爬虫類ハンター」企画は、2016年9月の初回「インドネシア編」の放送以降、年2カ国を巡るペースでシリーズ化され、2019年8月の「メキシコ編」まで計12回が放送された。希少な爬虫類を求めて世界各地を巡るX氏の旅に密着取材するものである。X氏の爬虫類に対する豊富な専門知識とマニアックなこだわり、何よりそれを発見し捕獲しようとする際の少年のような興奮が、スタジオMCをひきつけ、視聴者の反響も大きかった。

2017年8月16日にゴールデン2時間スペシャルで放送した『クレイジージャーニー』は、第44回放送文化基金賞・テレビエンターテインメント番組部門最優秀賞を受賞し、以降、プライムタイムのスペシャル番組枠でも放送されるようになった。

2 本件放送の概要

問題が発覚した「メキシコ編」は、2019年8月14日午後9時から11時までの2時間スペシャルと、同日午後11時56分から翌日午前0時55分までのレギュラー枠で放送された（以下、2つの放送を合わせて「本件放送」という）。

(1) 2時間スペシャル

「これまでクレイジージャーニーでは、88人のクレイジーな旅人たちが、リアルかつ刺激的な旅を届けてくれた」とのナレーションからVTRが始まる。過去に放送された映像から「日本人の知らない世界のクレイジーなカルチャー」が複数紹介された後、「爬虫類ハンター」企画となる。X氏が毒ヘビやワニを素手で捕まえる過去の映像とともに、「こんな危険な生物を確かな知識と野性の勘でハントする男」と紹介され、メキシコの旅が始まる。

*

空路メキシコシティに到着したX氏とディレクター。X氏は、今回の旅のお目当てを、見つけることの難しい「森に潜む悪魔のトカゲ」として語る。

車に乗り込み出発後、X氏が「森に潜む悪魔のトカゲ」とは別の、絶滅間近の超レアな生き物がいるところに寄りたいたと話す。その生息エリアを目指して走行中、X氏が「あっ、いた！」と鋭く叫ぶ。逃げ込んだ石の下を探すこと30分、X氏が捕まえたのはお目当てのものではないが、メキシコの固有種、メキシコトゲオイグアナであった。「野生のものは・・・」と語るX氏の指をイグアナが噛む。「ガッツリ手を噛まれたものの、逆に野生の力を感じることができて大満足のX」とのナレーションが入る。

その後、X氏とディレクターは湖に到着。舟に乗り換え、激レア生物の生息ポイントである小川エリアに移動する。汚水が流れ込み、ディレクターが「臭い」「冷たい」と悲鳴を上げる中、水中に手を突っ込み3時間。「押さえた！」と声を上げるX氏の手には大きなオタマジャクシのような生物が。日本ではウーパールーパーとして知られるメキシコサラマンダーだった。「まだいるじゃん」「初めて見た野生のやつ」と興奮するX氏。ナレーションも、「さすが持ってる男X。執念の搜索で1つ目のお目当て、絶滅寸前のメキシコサラマンダーを見事ハント成功！」と伝える。

*

翌日、お目当ての「森に潜む悪魔のトカゲ」を探しに車に乗り込むX氏。生息エリアに到着、早速森林に分け入り、急斜面を上って探索する。

1時間後、切り立った崖のある場所に到着。「こういう崖の斜面を利用して棲んでるトカゲもいます」と語るX氏が突如走り出し、崖のすぐ手前の土の上にダイブ。1度は失敗するも、2度目のダイブで獲物をキャッチする。ナレーションは、「崖の危険地帯でダイビングキャッチに成功したのはメキシコの固有種アリゲータートカゲ」と説明。X氏はまたもやトカゲに噛みつかれるも、「ここに来ないと見れないので良かった」と喜ぶ。

*

残すは、この旅最大の目的、「森に潜む悪魔のトカゲ」。X氏は草木の生い茂るエリアから岩の多いエリアに場所を変え、入念に探し続ける。6時間が経過した。「いた！」岩のすき間に体をねじ込むX氏。「あっ、噛む」「尻尾とった！」引きずり出し、首根っこを押さえる。「これ！メキシコドクトカゲ！」「すげえ、いるじゃん！」X氏は興奮しながら、下顎にある毒腺、ゴツゴツした頭の骨のことなどを詳しく解説する。

最後にX氏が「やっぱりねえ、ああいうモンスターがいるんですよ」「爬虫類探す旅、まだまだ続けます」と語り、VTRは終了する。

(2) レギュラー枠

前記2時間スペシャルのダイジェスト版に続いて、ナレーションは、X氏による神がかり的なハントで予定していたスケジュールよりも大幅に早く終了したので、さらに「森に潜む妖精」と呼ばれるレアなトカゲのハントに挑んだと伝える。

生息エリアを数時間かけて入念に探索。X氏が木の枝にいる獲物を発見する。X氏は木に登り、枝を這って近づき、手を伸ばすも、獲物は落下。慌てて木から降りたX氏が地面を探し捕獲。「アオキノボリアリゲータートカゲ、捕った！」X氏は鮮やかなエメラルド色をしたトカゲの特徴を詳しく説明する。

*

「森に潜む妖精」ハントの帰り道の車中、ドライバーが知り合いの大学教授のところに爬虫類が見られる場所があるので行ってみないかと誘い、一行はメキシコ国立自治大学に到着。X氏は教授と合流し施設内の植物園に向かう。園内はメキシコ特有の様々な生き物が放し飼いにされている半野生的な場所であるとのナレーションが入る。

園内でX氏はガラガラヘビとメキシコの固有種であるヘルメットイグアナを発見。ヘルメットイグアナを捕獲し、「これ超レア」と喜ぶ。

最後にX氏は「こういった守られた場所に生き物が暮らしているというのは来た甲斐がありましたよ」と語り、VTRが終了する。

Ⅲ 委員会の検証

委員会は、TBSから提出された本件放送を含む「爬虫類ハンター」企画12回全ての映像、報告書、追加報告書、その他の資料を検討するとともに、TBSのプロデューサー、総合演出、ディレクター、X氏、ロケの際のリサーチや各種手配に関わったコーディネーターら合計8人に対し、約12時間にわたり聞き取りをした。その結果に基づき、本件放送の制作・放送に至る経緯を検証した。

1 『クレイジージャーニー』の制作体制

『クレイジージャーニー』はTBSの制作局制作一部が担当した番組で、プロデューサー、マネジメントプロデューサー、総合演出、ディレクターなどが配置されていた。ディレクターは制作会社のスタッフを含め17人、アシスタントディレクター7人は全員が制作会社のスタッフであった。

『クレイジージャーニー』は、TBS社員の総合演出（以下「A総合演出」という）の提案から始まった。学生時代、バックパッカーとして世界を遍歴したA総合演出にとって、この番組は念願の企画だった。A総合演出は、リサーチを通じて上がってきたジャーニーの候補者の全員と自ら会い、出演交渉する。そしてジャーニーのスケジ

ルールや企画内容を考慮し、ロケ担当ディレクターを企画ごとに1人ずつ指名する。以後、ロケ準備から編集まで、個々の担当ディレクターとの2人のやりとりを中心に番組制作は進む。

番組スタッフの全体会議はなく、プロデューサーは予算管理やMCたちの所属事務所との連絡や交渉業務に専念し、番組内容にはほぼ関与していない。マネージメントプロデューサーは番組全体のコンプライアンスを担当し、紛争地域や麻薬といった危険なネタを取り扱う際は、ディレクターからの相談に応じてロケ内容を事前に確認するが、通常はスタジオ収録時にVTRを視聴し、不適切な発言や表現があれば指摘する仕事を中心だった。

「爬虫類ハンター」も、A総合演出がX氏の著書を読んで興味を持ち出演交渉し、実現に至った。A総合演出はTBS社員のBディレクターを担当ディレクターに指名し、Bディレクターは初回「インドネシア編（2016年9月放送）」から10回目の「南アフリカ編（2019年2月放送）」まで、全てのロケ及びVTR作成を担当した。

2 本件放送の制作過程

(1) ロケ前の企画・準備の経過

2019年6月初旬、A総合演出が他部署に異動となり、Bディレクターが総合演出に昇格した（以下、Bディレクターが総合演出に昇格して以降の呼称を「B総合演出」という）。海外ロケに行くことが難しくなったB総合演出は、7月の予定が空いていたCディレクター（制作会社社員）に、自分に代わって行くことを依頼した。Cディレクターは2019年1月から『クレイジージャーニー』にディレクターとして関わり、昆虫を食べる日本人女性のジャーニーに密着取材するロケなどを経験していた。多忙になったB総合演出はCディレクターに対し、X氏との打ち合わせまでに、「爬虫類ハンター」の過去の映像を見ておくよう指示した。

Cディレクターは、過去の映像を視聴して、X氏が捕獲した動物の全てが実際に現場で探した動物なのか疑問を抱いたが、B総合演出に対し「動物が見つからなかった場合はどうするのか？」などと確認することはなかった。B総合演出も、動物を捕獲する場面の撮影方法については、経験豊富な「X氏とコーディネーターに任せておけば大丈夫」であるとして、Cディレクターに詳しい説明をしなかった。委員会の聞き取りに対し、Cディレクターは、海外ロケで動物を取材する番組ではコーディネーターが現地で動物を事前に準備していることが通常であると思い込んでおり、深く考えなかったと語った。

6月17日、TBSにおいて、X氏、B総合演出、Cディレクターが同席して、捕獲したい動物についての確認を行った。局側からはメキシコで有名な毒ヘビ（ガラガラヘビ）の捕獲を提案し、X氏からはメキシコサラマンダーとメキシコドクトカゲの

提案があった。

この打合せを踏まえ、Cディレクターは担当ADに対し、上記3種類のお目当ての動物とそれらを捕獲する場所の近くに生息する別の動物について、いずれも現場で捕獲できなかった場合のバックアップ（予備）があればお願いしたいと、コーディネーターに伝えるように注文した。

担当ADは6月20日、電子メールでコーディネーター（以下「Dコーディネーター」という）に対し、捕獲を希望する毒ヘビの名称、毒ヘビやメキシコドクトカゲの捕獲シーンの撮影場所の希望などを伝えた。日本在住のDコーディネーターは依頼内容を現地メキシコの研究者に送り、返事を待った。

6月25日、CディレクターはDコーディネーターと連絡を取り合い、狙いたい動物、日程、現地メキシコからの返答内容を確認した。Dコーディネーターからは、今回捕獲を狙っているメキシコサラマンダーとメキシコドクトカゲの他いくつかの動物について、個体数が少なく、限られた日数のロケで発見できる可能性が低いことを告げられた。

そこでCディレクターはDコーディネーターに対し、現地の人に動物を事前に捕獲しておいてもらうよう依頼した。Dコーディネーターも、メキシコ人コーディネーターを通じて現地の協力者に、X氏が実際に捕獲できなかった場合のバックアップとして、事前に動物を捕獲しておいて欲しいと伝えた。

（2）ロケの事実経過

7月1日、Cディレクター、X氏及びDコーディネーターがメキシコシティに到着した。Cディレクターは、撮影前の打合せでX氏に対し、ロケの時間も限られているので、お目当ての動物がなかなか見つからない場合には相談させて欲しいという言い方で、動物が事前準備されていることを伝えた。この打合せについてX氏は、委員会の聞き取りに対し、Cディレクターから、お目当ての動物が捕れなかった場合の保険があるというようなことを、あいまいな言葉で伝えられたかもしれないが、捕れなかったのであればそのことを放送で言うべきであるし、映像として残したいのであれば、どのような経緯で撮影したかを放送で言った方がいいと話した、と説明している。

その後一行はホテルに到着。そこでDコーディネーターが撮影協力を依頼していたメキシコ国立自治大学の爬虫類学者と合流した。この爬虫類学者は以後、ロケ終了まで同行した。

7月2日、一行はメキシコシティの南、ソチミルコにある研究施設・水生生物繁殖研究センターに行き、メキシコサラマンダーが施設内で複数匹飼育されていることを確認した。X氏によれば、その場で施設の説明をするシーンを撮影したとのことである（放送では使用されていない）。Cディレクターは、施設からメキシコサラマンダー

を借り受け、探索ロケに入った。

一行はロケ現場に移動し、X氏が数時間かけて足場の悪い湖の中でメキシコサラマンダーを探したが、見つからなかった。そこで、Cディレクターの判断で、借り受けたメキシコサラマンダーをネット籠に入れて水中に沈め、X氏が捕獲するシーンを撮影した。X氏は委員会の聞き取りに対し、ネットのようなものの中にいたことは事実だが、探索場所には空き缶や空きビン、地元の漁師が残した漁具などのゴミが沢山あり、その中も探していたので不自然に思わなかった、自分は動物をネット籠に入れて沈めるところは見ていないと説明している。

その後一行は、前記の爬虫類学者が所属するメキシコ国立自治大学に移動し、大学の植物園内で、学者が研究のために飼育・管理していたガラガラヘビとヘルメットイグアナを放ち、ヘルメットイグアナをX氏が捕まえるシーンを撮影した。

7月3日、メキシコドクトカゲの探索ロケを行った。ロケ出発前、Dコーディネーターがメキシコドクトカゲを捕獲しておくよう依頼していた人物と合流し、その人物が持参したメキシコドクトカゲを車に積み込んで出発した（なお、本件発覚後、局が前記人物に確認したところ、その人物は爬虫類を売買する業者で、ロケで使用したメキシコドクトカゲは知人から購入したものであった）。

X氏とCディレクターは、現地住民による目撃情報がある場所を数時間探したが見つからなかった。休憩をはさみ、X氏がいない場でCディレクターは現地協力者と話し合い、事前に準備していたメキシコドクトカゲを岩の下に置くよう指示した。その後、X氏をその岩場に誘導して、捕獲シーンを撮影した。

ロケが終わり、ホテルへ戻るために車で移動中、X氏が車窓からメキシコトゲオイグアナを発見した。X氏とCディレクターは車を降りて追跡し、石の下に潜ったメキシコトゲオイグアナを捕獲した。

7月4日、アリゲータートカゲの探索ロケを行った。途中、迫力のある崖を見つけたCディレクターは、そこで撮影したいと考えた。同行していた前記爬虫類学者からも、このような場所においてもおかしくないとの助言もあり、Cディレクターが撮影場所を決め、トカゲが逃げない程度の穴を掘り、そこに爬虫類学者が近くの森で捕まえておいたアリゲータートカゲを置いた。そして、X氏を穴の方向に誘導して撮影した。

7月5日、アオキノボリアリゲータートカゲの探索ロケを行った。数時間かけて森を探索中に、X氏が木の上にいるアオキノボリアリゲータートカゲを発見し、捕獲する場面を撮影した。全日程を終えた一行は同日の深夜便に乗り、7月7日帰国した。

(3) 編集、放送に至るまで

7月13日と15日に、Cディレクターが仮編集したVTRをB総合演出がチェックしたが、CディレクターはB総合演出に対し、捕獲した動物の中に、あらかじめ準

備されたものが含まれていることを伝えなかった。

7月23日、VTRの完パケ作業終了後に行われたスタジオ収録にはプロデューサー、マネージメントプロデューサーも立ち会い、サブ出しVTRをチェックしたが、何ら疑問を抱くことがなかった。こうして8月14日、本件放送がなされた。

3 過去10回の「爬虫類ハンター」における事実関係

TBSは、委員会に提出した報告書で、本件放送以前の過去10回の「爬虫類ハンター」の放送について、(本件放送のように)あらかじめ協力者から借り受けた動物、または協力者が別の場所で捕獲した動物を、撮影の直前に現場に置くには至っていないものの、2回目の「マダガスカル編」以降の回において、一定の準備をしていたことを明らかにしている。具体的には、捕獲した全37種類の動物のうち11種類について、現地の協力者に対して、事前に目的の動物を発見したらその場所を連絡するよう要請し、また、その際に目的の動物を捕獲してしまった場合は、捕獲した場所に、前日か当日にまた放ってもらったうえで、Bディレクター(当時)はその場所付近にX氏を誘導し、そのことを知らないX氏がその場所一帯を探索して動物を捕獲していたというのである。

Bディレクター(当時)は、そのような手法は、あくまで動物を探索するエリアを狭める行為であり、仮に現地協力者が動物を捕獲しても、その場所に放すのであれば問題ないと考えていたが、問題発覚後に社内の聞き取り調査を担当した制作部長やマネージメントプロデューサーは、Bディレクターの手法に問題がないか、判断が揺れていた。視聴者からすれば、「爬虫類ハンター」の企画の目的を踏まえたとき、Bディレクターの手法を許容できない人もいるかもしれない。委員会は、過去10回の「爬虫類ハンター」の放送については審議の対象としていないが、本件放送に限らず、制作者それぞれが個々の番組の目的を踏まえてどこまでが放送倫理に照らして許容されるか、自主自律的にその限界を議論することが求められよう。

IV 委員会の考察

1 視聴者との約束を裏切った本件放送の「事前準備」

本件放送で「事前準備」されていた動物とその方法を、TBSの調査の結果を踏まえて整理すると、以下のとおりである。

- ・メキシコサラマンダー：施設で繁殖させた動物を施設から事前に借り受けて撮影の直前に現場に置いた。
- ・アリゲータートカゲ：協力者である爬虫類学者が近くの森で捕獲した動物を事前に借り受けて撮影の直前に現場に置いた。

- ・メキシコドクトカゲ：協力者がビジネス用に購入した動物を事前に借り受けて撮影の直前に現場に置いた。
- ・ヘルメットイグアナ：協力者である爬虫類学者が研究のために飼育・管理していた動物を事前に借り受けて撮影の直前に現場に置いた。

そもそも、「爬虫類ハンター」の目的や醍醐味は何だろうか。TBSの報告書を引用すれば、X氏が「希少動物を発見・捕獲する様子をカメラが追うドキュメンタリー性が本企画の根幹」であると説明し、「自力で爬虫類を探す真剣さ、捕獲したときの爆発するような喜びようが、愛されるキャラクターとなり、視聴者にとって『愛すべき爬虫類オタク』の奮闘ぶりに『嘘はない』と思われていたはず」と結論づけている。

そうであるとすれば、あらかじめ協力者から借り受けた動物、またはあらかじめ協力者が別の場所で捕獲した動物を現場に置くことは許されないのではないか。それは本件放送の視聴者との約束を裏切ることではないだろうか。

委員会は、かつて、フジテレビのバラエティー番組『ほこ×たて』『ラジコンカー対決』に関する意見（委員会決定第20号）の中で、テレビ番組において「どこまで事実即した表現をすべきかについての放送倫理上の判断は、ジャンルや番組の趣旨を考慮した幅をもつものになる。その基準は、出演者や関係者、さらには視聴者をも含む人々の間において——明示的か否かは別として——互いに了解された『約束』として築かれるもの」であり、同番組はその「約束」を破ったとして、放送倫理違反を認定している。

A総合演出は、本件放送の制作には関わっていないものの、委員会の聞き取りに対し、この番組ではVTRを面白くするために動物を事前に準備することなど全く考えていなかったと語った。また、TBSも報告書で『クレイジージャーニー』が純粋なドキュメンタリーではなくバラエティーというカテゴリーに位置づけられるとしても、「事実即した番組」であることが「視聴者との約束」になっていたことは認めている。事前に準備した動物を用いてX氏の捕獲シーンを撮影することは、視聴者との間の約束を逸脱していたと言わざるを得ない。

2 「撮れ高」に縛られる現場

ではなぜ、視聴者との約束を逸脱した番組作りがなされてしまったのか。

その原因の1つが「撮れ高」の問題であろう。番組に求められる素材を確実かつ効率的に撮影できるか否かは、スケジュールや予算によるところが大きい。Dコーディネーターによれば、希少動物を発見、捕獲する類の企画は、種類や数にもよるが、生息地まで移動する日数を含め、ロケは数週間、時には何十日にも及ぶことがあるという。

しかし、本件放送のロケは、わずか現地滞在4泊5日という短期間で行われた。海外で、カメラクルーもアシスタントも伴わず、たった1人でジャーニーの予測できない行動に同行する。カメラを回しながら1日数時間、高温多湿の森林地帯を歩き回る過酷なロケの中で、いくつもの希少な動物を見つけ、捕獲するシーンを撮影しなければならない。もし希少な動物が見つからなかったらどうするか。ディレクターの肩にはプレッシャーが大きいのかかっていたのではないかと。

Cディレクターは、プレッシャーに追いつめられていたわけではなくとも、「撮れなくてもいい」という事前の指示があれば、またはVTR尺が短くともいいのであれば、こんなことをしなかったと思う、どうにかして捕まえる映像を撮って帰らなければならないと思っていたと振り返った。つまり、Cディレクターは、この企画はX氏のハントありきで、あらかじめ動物を現場に置くという手法なくして、短期間のロケで次々と希少な動物を発見し捕獲する映像の「撮れ高」を確保することは困難であると考えていた。本件放送の問題は、X氏のハントシーンの「撮れ高」に縛られていた番組の「作り方」そのものに内在していたと言えよう。

確かに、X氏が希少な動物を次々と捕獲する姿は、「爬虫類ハンター」企画の魅力のひとつであったろう。この点、TBSはホームページ上で、番組内で捕獲した動物全43種類のうち、「メキシコ編」の4種類及び過去10回の11種類について、上述した問題があったことを発表した。裏を返せば、全体の3分の2にあたる28種類は、問題とは関係なくX氏が真剣勝負で捕まえたものだった。そのリアルでガチな28種類でも番組は十分に成立したのではないかと。

また、時にはX氏が希少な動物を発見できなかったり、捕獲できなかったりするシーンがあってもよかったのかもしれない。実際、初回の「インドネシア編」(2016年9月放送)では、目的としていた野生のコモドオオトカゲを捕獲どころか発見すらできず、固定カメラを餌のそばに仕掛けてロケを終了し、帰国した。それがスタジオ収録直前になって、現地から送られてきた映像に幸運にも野生のコモドオオトカゲが映っていて、スタジオ収録は大いに盛り上がった。そこからこのシリーズは始まったのである。

委員会の聞き取りにおいて、ベテランの関係者たちは、捕まらなくてもいい、捕まえることができなくても面白く作るのがこの番組だ、と口を揃えた。しかし、そのことを現場と十分に共有していなかったのであれば、それは遅きに失した弁解でしかない。そして、「インドネシア編」における「ハンターが捕獲できない」ことが生み出す別のリアルさや意外性がCディレクターに踏襲されなかったことも、極めて残念であったというしかない。

3 孤立する担当ディレクター

TBSは、報告書において「問題の責任を個々の制作者にのみ求めることはできない」とし、制作局の構造的問題を挙げている。その1つが「ディレクターの孤立化」であり、このことは全体会議が開かれなかったことから明らかである。総責任者の局プロデューサーは、委員会の聞き取りに対し、この番組は総合演出が選ぶジャーニーのそれぞれの旅を、ディレクター1人がデジタルカメラで撮影してくるもので、全体会議で話すべきことがなかったからと語った。

しかし、本当に全体会議で話すべきことはなかったのだろうか。番組のコンセプトや目的をスタッフ全員で確認し合う場がなくてよかったのだろうか。カメラクルーなしの海外ロケ、仮編集までを、ディレクター1人に背負わせてよかったのだろうか。

委員会の聞き取りにおいて、過去10回の「爬虫類ハンター」に関して、現地協力者に事前の探索を依頼した理由を尋ねたところ、Bディレクターは、A総合演出からは確実に獲物を撮ってくることを強く求められたからであると説明し、これに対し、A総合演出はそのような強い要請をしたことはないと否定した。どちらの発言や認識が事実であるかは不明のままであったが、2人の間でさえ、どんなりサーチや準備が必要かについて互いの認識を十分に確認していなかった、とは言えよう。また、本件放送に関しても、B総合演出は急にロケを担当することになったCディレクターに対し、「X氏とコーディネーターに任せておけば大丈夫」として動物の捕獲場面の撮影方法や準備について詳しい説明をしていなかった。そして、CディレクターもB総合演出に対し、「動物が見つからなかった場合はどうするのか？」などの確認をしないまま、海外で動物を取材する番組ではコーディネーターが動物を事前に準備していることが通常であると思込んでいたのである。しかし、全体会議が開催され、総合演出とディレクターの間にプロデューサーなど第三者が介在すれば、制作者間での意思統一が行われたであろうし、少なくとも本件放送のように、あらかじめ協力者から借り受けた動物などを撮影直前に現場に置くようなことには至らなかったのではないかと。

また、「爬虫類ハンター」の視聴者の中には、トカゲの毒腺や、頭の骨の説明といった、X氏の豊富な知識に魅了された者もいたであろう。さらに、過去の放送回では、現地の住民が生活のために動物を捕獲して市場で売り、それを外国人が高値で購入して行く実態を紹介するなど、貧困、グローバルな格差といった社会問題に切り込む回もあった。このようなVTRの意図が、全体会議の場で共有されていれば、ロケや編集作業に向き合うディレクターの姿勢が違ったものになっていた可能性もあったはずである。実際、委員会の聞き取りにおいて、ベテラン関係者の1人は「話し合い不足」を口にした。制作スタッフが、この企画は何が大切で、何をやってはいけないか？番組の目的や本質を繰り返して議論できていれば、こうはならなかったのではないかと。人によってはあどけなく聴こえるかもしれない「話し合い不足」という言葉は、現在の

放送界が抱える問題かもしれない。

さらに、彼はこう続けた。今後のテレビは、働き方改革だけでなく「作り方改革」、作り方を考えなきやいけない過渡期に来たのかもしれないね。――

委員会は、前述した委員会決定第20号の中で、バラエティー番組において、他の番組にはない大胆な試みを実現し、継続するためには、情熱やひらめきの一方で、「冷静に自己を見つめ、仲間と丁寧に話し合い、相互に承認しあう手続きが必要」だと述べた。

TBSは報告書の中で、「制作者を孤立させてはならない」とし、番組内容の質と適正な制作工程を「複眼でチェックする」必要性を指摘している。そのうえで、今後、制作局では随時、考査担当のマネジメントプロデューサーが主催して、レギュラー番組ごとの「演出講座」を開き、「演出の適切・不適切」についてブレインストーミングをしながら考察し、制作者の意識向上を図る研修に取り組むとのことであり、委員会としてもその成果を見守りたい。

V 問題発覚後のTBSの対応

問題発覚後のTBSの対応は迅速であった。連絡を受けた9月2日のうちに番組関係者に聞き取り調査を開始し、同月11日には広報リリースと公式ホームページで視聴者にお詫びするとともに、調査が完了するまで番組を休止することを公表し、同日のニュース番組で放送した。そして、10月21日には、不適切な手法で視聴者の皆様の信頼を損なったことを重く受け止めて、番組の継続は困難と判断し、放送終了を決定した。TBSは同日、ドキュメントバラエティー番組『消えた天才』で、少年野球の投球映像やフィギュアスケートのスピン映像などを早回しすることで実際より速く見せる不適切な加工があったことについても真摯に受け止め、放送終了を決定した。

TBSは、委員会に対しても、10月9日には詳細な報告書を提出し、放送終了を決めた後の11月6日にも追加の調査結果を記載した報告書を提出している。報告書の中でTBSは、再発防止に向けて、たとえば迷った場合には別の視点を持つ複数の仲間の声を聞いた上で判断することの習慣化や、番組内容のチェック体制の比重を編集後のVTRチェックから企画段階での事前考査に移す必要性などについて触れている。問題発覚後のTBSの対応は、自主自律の観点から、十分に評価できるものであったと言えよう。

VI 委員会の判断 放送倫理違反があった

NHKと日本民間放送連盟が1996年に定めた「放送倫理基本綱領」には、「放送人は、放送に対する視聴者・国民の信頼を得るために、何者にも侵されない自主的・自律的な姿勢を堅持し、取材・制作の過程を適正に保つことにつとめる」との規定がある。

「爬虫類ハンター」は、局自身が認めるように、X氏が「希少動物を発見・捕獲する様子をカメラが追うドキュメンタリー性が本企画の根幹」であった。本件放送が、その核心である希少動物に、あらかじめ協力者から借り受けた動物、または別の場所で捕獲した動物を用いたことは、制作過程の重要な部分を制作者側が十分に把握していなかった点で、その過程が適正に保たれていなかったと言ふべきであり、また、X氏が「確かな知識と野性の勘」を駆使して自力で希少動物を探し出したものと信じたであろう多くの視聴者との約束を裏切るものであったというほかない。

また、「NHK・民放 番組倫理委員会」が1993年に出した「放送番組の倫理の向上について」と題する提言の「1 放送人としての心構え (2) 事実に基づいた取材・制作を行う」には、「面白さを追求するあまり、過剰な演出に走ってはならない。特にドキュメンタリーでは、当初の構想にのみ固執せず、取材現場の状況に応じて、柔軟に変更する知恵と勇気を持つべきである」とある。『クレイジージャーニー』はバラエティー番組に位置づけられるとはいえ、事実に依拠した番組であることは局自身も認めている。本件放送の制作過程を踏まえれば、希少動物の捕獲という「当初の構想」に固執するあまり、「現場の状況に応じて、柔軟に変更する知恵と勇気」を見失っていたと指摘されてもやむを得ないであろう。

よって、委員会は、本件放送には放送倫理違反があったと判断する。

VII おわりに 『クレイジージャーニー』から始まる改革

『クレイジージャーニー』の放送終了を最も残念に思ったのは、「88人のジャーニーたち」だったかもしれない。彼らは、放送メディアの多くが、ともすれば「危険」「予算に合わない」として慎重になっていた「未開の秘境」「危険な紛争地帯」「ダークな裏社会」などに、際立った好奇心と自らの判断で入り込み、リアルでディープな世界を私たちにを見せてくれた。ジャーニーたちの一見わかりにくく、視聴率が取れそうもないようなマニアックなこだわりが、この世界の多様なあり方や可能性をも掘り起こし、人々の心を揺さぶったのである。組織に頼らず自らのやり方で興味の赴くままさまさまな障害をのりこえるジャーニーたちは痛快で、それが人気の理由でもあっ

ただろう。しかし、彼らの突破力に依存し、危険地帯の実態や、多様な社会や文化、人間を深く掘り下げる努力を決して疎かにしてはならないはずだ。ジャーニーたちのこだわりや情熱は、むしろ、放送に関わる人間に求められるものではないだろうか。

昨年12月に行われた委員会の聞き取りから半年あまりが経ったが、新型コロナウイルスの渦中にある私たちには、ベテラン関係者の1人が口にした「作り方改革」という言葉がリアルに響く。放送の現場では、制作延期や中止を余儀なくされ、オンラインによる打ち合わせ、リモート撮影、マスクやフェイスガードの着用、使用した衣装、小道具、機材などの消毒やアクリル板の設置など、人と人とは接触しない、「3密」を避けた新たな制作スタイルが日々模索されている。この人と人とは遠ざけられ、より孤立化が進む現在だからこそ、「話し合う、言葉を交わす、心を通わす」ことの大切さは、より増しているのではないだろうか。

この問題から導き出せる教訓と可能性は、失ったものよりもはるかに大きく、深く、思いもよらない広がりを持つはずだ。そして、コロナ禍の逆境を真摯に深く受け止め、組織の仕組みやコンテンツが、より良い方向に変わるチャンスととらえ、それをきっかけに、新たな制作スタイルや番組を創造することの意義を考える。そうした試行錯誤から、本当の「作り方改革」は始まるはずである。